

卷 頭 言

技 術 の 力

三 井 太 信*



3カ年半の在欧勤務中取調べたことを顧みて、しみじみ感じられることは技術の持つ偉大な力である。私の駐在中にはスエズ事変、ハンガリー事変、中東の政変、ドゴール政権の出現、最後にはベルリン問題などなかなか多彩な政治的事件が相継起したが、こうした事件に対する欧州人の最大関心は兎も角平和が維持されるかどうか集中して、平和の維持のためには国の威信もイデオロギーも犠牲として敢えて辞さないとい

う空気であつた。しかもこれは戦争の災禍を恐れるからというよりむしろ戦後再建した経済の繁栄への道を再び危険に陥れたくないという気持からである。換言すれば第二次大戦前のヒトラー出現時代のような不況と失職に痛めつけられたデスペラートな気分はどこにもなく、将来のよりよき生活より明るい前途に確信を持ちそしてこの確信の中から平和維持の悲願が湧き出して来ているのである。このような欧州人の気持は特に国際経済の面に如実に現われており、炭鉱共同市場の成立、欧州間における貿易自由化の進展、一般共同市場の成立、そして通貨の交換性回復へとより自由な、よりダイナミック経済への途を花も嵐も踏越えて進んで来ている。第一次大戦後の欧州経済の暗さを知る人にとっては第二次大戦後のこの経済の歩みは確に驚異であり、また資本主義経済の甦生を物語っているかに見えるのは当然である。一体この傾向を産んだ根本原因はどこにあるのだろうか。第一に米国経済の繁栄が戦後の自由諸国の復興の大きな挺子となつたことが挙げられよう。戦争が終つた時米国は石油化学、電子工学をはじめ金属圧延技術に至るまで幾多の新しい技術を育て上げ、この新技術の旺盛な発展は景気変動の波を乗り越えて経済の上昇を停滞せしめず、一方この新技術新製品は海を渡つて復興間もない欧州に滲徹し西欧経済に対する米国経済の優位を確立しさらにこれを被保護者の地位に置くまでに至つた。その最も端的な現われは欧州諸国貿易のいわゆるダラーギャップとこれを埋めるための米国の経済援助であつた。ダラーギャップの存する限り米国のクサミは欧州には風邪となつて伝播した。しかし1953年頃から新しい傾向が産れて来た。復興の段階を一応完了した欧州は自から産み出した新しい技術をつぎつぎと工業化して行くとともに急速に米国の新技術を吸収摂取し次第に米国の新製品に対する依存を脱却するとともに、これら新部門に対する投資が景気維持に対する背椎を構成することとなつた。そして新技術による工業発展が一順し、技術的創造活動に遅滞の影を濃くした米経済が次第に激しい景気変動に暴されはじめた頃には欧州には技術革新が華と咲き乱れ、米は対欧工業品貿易の主体を製品輸出から技術資本の輸出に切替えはじめ、一方新技術を自家葉籠のものとした欧州は米国に対する労賃格差を利用して新製品は欧州から米国に向つて流れ出した。この一連の経済現象はこれまで官民最高の智慧と発達した諸経済政策を以てしても如何ともなし難かつたダラーギャップを逐次消失せしめることとなり、一方一時米国に集中した金は再び西欧に向つて流出しはじめ国際貿易特に世界の工業国間貿易はまれに見る繁栄と均衡を見るに到つたのである。前述の一連の自由化への諸制度はこの繁栄と均衡を確保強化せんとする西欧の積極的対策であり、この繁栄と均衡を擾乱されたくないという欧州人の念願は平和の維

* 通商産業省通商局振興部経済協力第二課長
鉄鋼技術共同研究会調査部会長

持を政治の至大使命とする傾向を育てた。換言すれば技術の持つ偉大な創造力は景気を支配すると同時に更にまた政治をも支配する地位にまでのし上つたのである。私はこれが第二次大戦後の経済を特色づける最大の要素であり、また第一次大戦後の経済から截別する決定的相違点であると信ずる。

私は故国に帰つてわが国においても西欧において起つているのとはほぼ同じ現象が多少時期のずれはあるにしてもまのあたりに起つているのを見て洵に喜ばしいことと思つている。しかもこのわが国の発展の勢いは西欧に比して更に強く更にダイナミックであり、従来日本経済の致命的欠陥と考えられていた人口の多いこと、民度の低いことの二つの要素がかえつて発展の上昇率を西欧のそれより急速なものとしているかに見える。今日までは国内市場の狭隘なることが日本の産業の発展のための最大障碍と考えられていたが、現在の段階まで到達して見るとこの障碍は消失はしていないまでも近い将来消失するものと予想してもよいようである。しかしながらこの発展の勢いはいつまで永続するものであろうか。別言すれば現在のこの旺盛な成長率をどこまで長期の経済予測の中に取り入れ得るだろうか。悲しいかな現今の経済学は短期的経済予測についてはある程度の指標を示し得るが長期の予測については全く無力と言つてもよい。なぜなれば前述のごとく景気に対し偉大な支配力を持つ技術的創造力の展開を何人も量的に予測し得ないし、また予測し得る手段もないからである。長期の経済予測に従事する人々はこの点抜目なく「技術面において大変革なしとすれば」という前提を設ける。しかし第二次大戦後の経済の根本的特徴であつたこの技術面の革新をなしとする前提に立つた経済予測はどれだけの意味を持つものであろうか。もちろん何も無いよりはましであり、また常に不確立な将来に面して決断を行なつて行かねばならぬ経営者にとつてこれは一つの参考となる事柄であらう。しかし将来の計画を樹てるに当つてかかる長期予測に依存する傾向が生ずる時国民も経営者も危険なわなに近づいていることを意識すべきである。なぜならば現在経済が速やかな成長率を示している場合は経済予測は余りに楽観的なものとなりやすく、逆な場合は余りに悲観的なものとなりやすいからである。技術的創造力の展開は決して同じ歩調をとるものでないことは最近の米国の例の示すがごとく、一時的にせよ半永久的にせよ停滞の傾向を示すことがあり、また終戦後数年間の欧州におけるごとくこの創造力が潜力の形を呈することもあることによつても明らかである。殊にわが国においてはこの技術的創造力は自から産み出した力ではなく、大部分は米国からまた欧州から摂取した力であるという点において欧米とは異つていることを再認識する要がある。別言すればわが国の経済の発展を培つている水は自家の泉の水でなく他家の泉を樋をもつて導いて来たものである。他家の泉がかれる時また両家の間の樋が壊れる時自家の木々は成長をとめる。自家に泉を持たない時われわれは自家の樹木の長期の繁栄を希い得るであろうか。たとえ希い得るものであるとしてもその繁栄を誇示することができるであろうか。いな他家の泉にたよりながら自家の樹木が他家の樹木より大きく育つことを期待すること自体が不遜な希いではないであろうか。

わが国の経済の長期の繁栄を真に確保するものは経済指数の加減乗除から割出される長期経済予測でもなく、また早い者勝ちの外国技術の導入でもなく、足下を根気よくそして組織的に掘下げることによつてのみ発見し得る技術的創造力の泉である。これが滞欧3カ年半の後私が日本に持帰つた最も強烈な印象である。